

聖書：マタイ 19：1～12

説教題：神が結び合わせたもの

日時：2019年12月29日（朝拝）

マタイの福音書はこの19章から新しい段階へ入ります。1節にイエス様は「ガリラヤを去り」と書いてあります。そしてどこへ向かわれたのでしょうか。「ヨルダンの川向こうを経てユダヤ地方へ」とあります。つまりこれはエルサレム行きの旅でした。しかも最後のエルサレム行きの旅でした。このあと21章でイエス様はエルサレムに入城し、一週間もしない内に捕らえられ、十字架刑にかけられます。そういう意味で地上にきた最終目的に向かっていよいよ最後の段階へ踏み進んで行かれたというのが今日の箇所です。そんなイエス様に大勢の群衆がついて来て、イエス様はその場で彼らを癒されました。厳しい戦いが始まろうとする中でも、こうして人々の必要に答えることにご自分を用いられたイエス様のあわれみ深いお姿がここにもあります。

さてそんな時、パリサイ人たちがみもとに来てイエス様に一つの質問をします。それはイエス様に教を請うためではなく、3節に「試みるために」とありますように、イエス様を罠に陥れるためでした。その問いはこれでした。「何か理由があれば、妻を離縁することは律法にかなっているのでしょうか。」今日もそうかもしれませんが、当ても離婚は微妙な問題でした。人々の現実と関わる問題でした。どう考えるべきか色々な意見がありました。ですからイエス様がどのように答えても、それに満足しない人々からの反対を受けることになります。当時、シャンマイ派という立場の人々は、姦淫のみが離婚の正当な理由であるとしました。それに対して、よりリベラルなヒレル派の人々は妻の側にある問題行動があったら、たとえば夫の夕食作りに失敗したら、それで離婚できるとしました。さらに後の時代のラビ・アキバは、もっと素敵な女性を見つけたら今の妻を離縁できるとまで述べました。果たしてイエス様はどうお答えになるのでしょうか。

これに対してイエス様はどういう条件を満たせば離婚していいかということから話を始めませんでした。むしろイエス様は天地創造に遡って、神は結婚をどのようなものとして定めたのか、その本来の御心に立ち戻って話を進められました。4節：「あなたがたは読んだことがないのですか。創造者ははじめの時から『男と女に彼らを創造され』ました。」創世記1章27節にそのことは書いてあります。なぜ神は男と女を造ったの

か。なぜこの2つの性を造られたのか。それはこの二つの性が結婚において組み合わせられて、ともに生きるようになるために他なりません。そこでは文字としてはそこまではっきり書かれていませんが、そういう暗示があるだろうことは容易に察することができます。そしてこれが疑い得ないものであることを示すために、続いてイエス様は5節で創世記2章24節を引用されます。5節：「そして、『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである』と言われました。」ここに聖書のはっきりした主張があります。それは夫と妻の関係は親子関係以上であるということです。このように結婚を考えている人は今日の日本でも少ないかもしれませんが、古代世界においてはましてやそうでした。親と子の関係は血のつながっている強い関係であるのに対して、夫と妻の関係はそうでない。従って何かある時に力を発揮するのは親子関係であると。その考え方に立って夫婦関係に親子関係が割って入るために色々な問題が起こって来ます。しかし聖書は違います。確かに十戒の第5番目の戒めに「あなたの父と母を敬え」とあり、これが重要な戒めであることがはっきりと語られています。しかし創世記2章24節の御言葉に示されていることは、夫と妻の関係はそれ以上であるということです。「父と母を離れて、妻と結ばれ」とあります。これはもちろん父と母を捨てるということではありませんが、夫と妻の関係はそれ以上であり、他のあらゆる人間関係にまさって優先されるべき関係であるということです。そして「ふたりは一体となる」とあります。これは「一つ肉となる」という表現です。従ってもう二人ではないのです。「一つ」なのです。第3版まではここは「それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです」と訳されていました。これが創造における神の御心です。神はこのように目的で男と女を造り、夫と妻が親子関係にも勝る最も深い一致の中でともに歩むことを御心として結婚を定められました。ですから離婚は神の御心にかなわないということです。神はそのようなことは意図していない。一度結ばれてから別れるなどという状態を想定していない。6節にあるように「神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません」となります。それは神の創造の定めに対することであり、神の御心に逆らうものです。イエス様はこうしてまず本質から説き起こされました。人間は自分の都合や考えで結婚したと思ったら離婚しようとし、どのような条件を満たせば私は離婚できるか、その正当な理由を見出して自分の思いを実行しようとし、しかしイエス様は結婚を定めた神の御心に立ち戻って考えるべきであるということを示しています。

これに対してパリサイ人たちの問いは続きます。それは7節にある通り、ではなぜモーセは離縁状を渡して妻を離縁せよと命じたのですかということです。ここでパリサイ

人たちが述べているモーセの命令とは申命記 24 章 1 節の言葉です。「人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥ずべきことを見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ、云々」。この「何か恥ずべきこと」とは何かを巡って、先に見たような見解の違いがありました。ある人は姦淫、ある人は食事作りの失敗、ある人はもっと魅力的な人を見つけた場合、等々。その内容はともかく、ここに、そういう場合は「離縁状を渡して去らせよ」と言われています。この律法をあなたは否定するのかということです。

これに対してイエス様は 8 節でこう答えられました。「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、あなたがたに妻を離縁することを許したのです。」 「心が頑な」とは、神の御心に従わないということです。わが道を行くと言って聞かない。反抗して罪の道を行くことです。その状態をそのまま放置したらどうなるでしょうか。益々恐ろしい混乱に陥るだけです。妻はそのままの状態なのに、夫は別の女を妻のように扱い、あるいは勝手に妻とする。その場合、もとの妻はどうにもならない最悪の状態に置かれます。そこからの救済策として、本来の御心にかなうものではないがモーセはそのことを許したのだと言っているのです。よりひどい悪の状態が続くより、まだその方が良いということです。良くはないが、もっと悪い状態よりまだ良いということです。それは積極的な命令ではなく、彼らに許したこと、譲歩です。「しかし、はじめの時からそうだったではありません」とイエス様は付け足すことにより、これが創造における神の本来の意図ではないことを繰り返しはっきり述べておられます。

そしてさらに 9 節のように語ります。「あなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁し、別の女を妻とする者は、姦淫を犯すことになるのです。」 これは 5 章 32 節で見た言葉と内容としては同じです。ここに離婚して誰かと再婚することは姦淫を犯すことだと言われています。その例外として「淫らな行いの場合は別」と記されています。第 3 版までは「不貞のためではなく」と訳されていました。もし不貞の罪を伴侶が犯した場合、それは結婚関係を破った出来事となります。Ⅰコリント 6 章 16 節：「それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。『ふたりは一体となる』と言われているからです。」 ここで言われていますように、遊女と交わった者は、それによって遊女と一体になりました。それによって先に存在した妻との一体の関係を破壊したことになります。このように相手が姦淫の罪を犯した場合、こちら側の人が離婚して再婚するのは合法的であると言わ

れています。またここでは言われていませんが、I コリント 7 章 15 節から、伴侶が自分を捨てて去って行く場合、すなわち「遺棄」のケースも、その離婚は合法的であると聖書に言われています（ウェストミンスター信仰告白第 24 章 6 項参照）。しかしそれ以外は認められないし、その離婚をした上で再婚することは姦淫を犯すことと言われていいます。よくテレビなどで芸能人が次々に離婚、再婚、離婚、再婚と繰り返していることが報道されていますが、それはまさに姦淫を犯す行為以外の何物でもないので。

さて、この話を聞いていた弟子たちが 10 節でこのように言います。「もし夫と妻の関係がそのようなものなら、結婚しないほうがましです。」これはどういう意味の言葉なのでしょう。気安く離婚できないのだったら、結婚なんかしないほうがましだという意味でしょうか。彼らも時代の子だったということでしょうか。それとも離婚しようと考えているわけではないが、イエス様のお話を聞いている内に、結婚はとてつもないことだと改めて捉えて、これでは誰が結婚できるだろうか！とある種の正しい恐れを持ったということなのでしょう。そのニュアンスは確実には分かりません。この「結婚しないほうがまし」「独身の方が良い」という彼らの言葉を受けて、イエス様は 11 節で「そのことばは、だれもが受け入れられるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができるのです。」と述べられました。そして具体的に 3 種類の人々をあげています。一つ目は「母の胎から独身者として生まれた人たち」。この「独身者」という言葉は、直訳では「宦官」という言葉で語られています。ですからこれは性的な機能の問題のため、あるいは生まれ持った何らかの他の障害や理由によって結婚生活が難しい人々を指していると考えられます。二つ目は「人から独身者にさせられた人たち」。これも「宦官」という言葉ですが、人によってその状態にされた人たち、あるいは比喩的に人によって結婚ができない状態に置かれた人々を指すと考えられます。三つ目は「天の御国のために、自分から独身者になった人たち」。イエス様もそうでしたし、パウロもそうでした。神の国のためにひたすら自分をささげて奉仕するため、結婚を後回しにする人です。これは許されている者たち、すなわち神からその召しと賜物を受けている人たちだけができることだとイエス様は言っています。聖書は決して独身でいる方がより霊的で素晴らしいとは言っていないし、逆にそちらの方が劣るとも言っていない。大切なのは、それぞれに対する神の御心に生きることです。創造の秩序から考えて結婚が一般的な召命ではありますが、そうでないように召されている人もいます。そのように召されている人はそのように生きなさい、それを受け入れて生きなさいとイエス様は言っておられるのです。

さて以上のことから私たちが学ぶことは何でしょうか。それはイエス様は結婚を常に本来の神の目的に沿って考えるべきことを主張しておられるということです。律法の中に、罪の現実に対して譲歩を示した言葉もありますが、だからと言ってそれを基準にしてはならない。絶えず本来の神の意図に照らして考えるべきであるということです。言い換えればいつも理想を見つめ続けていなければならないということです。このメッセージを受け止めるにあたって、次の二つの誤りを犯さないように私たちは注意しなくてはならないと思います。

一つはこの基準に達しないからと言って絶望したり、あるいはその基準に達しない人をさばくようなことをしてはならないということです。イエス様は今日の箇所でもパリサイ人たちにこのように語られましたが、聖書はこの理想的基準を満たしていない人は救われないとか、あるいは救われても低い祝福にしかあずかれないとは言っていません。誤解を恐れずに言えば、福音はどんな罪を犯した人でも主の前で悔い改めれば赦されると教えています。キリストの十字架を通して赦されない罪はないと。その罪を告白してキリストに信頼するなら、キリストの完全な義を頂いて天国に生きる民としていただける。また今なお結婚関係を保っている人でも、だからと言って神の御心にかなう理想状態にあるとは限りません。何とか形式的には保っていても、いつ壊れてもおかしくない状態にある人もあるでしょう。イエス様が述べておられるこの理想に照らせば、自分たちは完全であると主張できる人は誰もいないのではないのでしょうか。ですから私たちに必要なことは、この神の御心の前で自らを省みて、もし足りないところがあるなら、外れているところがある自分を思うなら、そのことを告白して悔い改め、主の赦しを願い求めることです。主は山上の説教の冒頭で「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」と言われました。自分は大丈夫だ、この基準はクリアしている！と言って高ぶる人こそ危ない。御前にへりくだって、悔い改めを新たにすること、そのことが大切なことではないでしょうか。

そしてもう一つは、だからと言って私たちはそのレベルにとどまっていて良いのではないということです。イエス様の今日の言葉はある意味で厳しいものです。ある人はこう考えるかもしれません。墮落前の創造の時の神の御心を持ち出されてもどうしようもない。今の私たちはもう罪に落ちてしまった状態にあるのだから、遠い過去のことを色々言われても、云々と。しかしそうではないのです。イエス様がこうして創造におけ

る神の定めについて語っているのは、これが絵に描いた餅ではないからです。イエス様は私たちがこの神の目的に立ち戻って生きる者となるというビジョンを捨てていないからです。言い換えればイエス様が伝えている神の国の福音は、本来の神の御心に生きることへの回復を導くものだからです。

前に見た山上の説教もそうでした。殺してはならない、姦淫してはならない、……。一つ一つの戒めを取り上げて、イエス様は律法の真意についての解説をされました。それは厳しい内容でした。誰がそのように生きることができるだろうかと思うような内容でした。しかしイエス様はあきらめていません。イエス様の恵みによって私たちはそのように生きる者へと立ち返って行くことができるから、イエス様は熱心に語っておられるのです。今日の箇所も同じです。ですから私たちに必要なことは、いつもこの神の本来の目的に焦点を当て、これを見つめて、そこに生きる者とされることを祈り求めて行くことではないでしょうか。改めて今日の箇所から結婚について「神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません」という御言葉を心に刻みたいと思います。結婚は私たちが自分の好みや都合で行うもの、うまく行かなくなったら簡単に解消できるものではありません。神はこの結婚に深い御心を持っておられ、またこれを良いものとして定めてくださいました。地上にある限り、完全から程遠い状態にある私たちですが、いつも主に御心を教えていただいて、新しい祈りを持って取り組む者でありたいと思います。そしてイエス様の恵みと力によって神の御心にかなう歩みへと導いていただき、これを定めてくださった神の栄光を現し、神を喜び楽しむ歩みへ導かれて行きたいと思います。